

7月のさろんテーマ

## 「エルトゥールル号」の映画化で 日本とトルコの友好物語を

【ゲスト】浦 聖治さん（NPO エルトゥールルが世界を救う理事長）



明治23年、オスマン帝国の軍艦エルトゥールル号が650名を乗せて和歌山県串本町沖で遭難。地元住民が69名を救助し、母国に帰りました。これが後のイラン・イラク戦争時、トルコ航空機による日本人救出につながり、来年この両国の絆の物語の映画ができる——お話です。（講演要約）

### ■百年前の恩返し

1985年3月17日、イラン・イラク戦争時、フセイン大統領が「今から48時間後、イラク上空を飛び飛行機はすべて撃墜する」と発表しました。テヘランにいた外国人は、我先に自国の救援機で脱出するのですが、日本政府はそれまでテヘラン路線がなく、危険地帯に飛行機を飛ばすのはどうかとためらった。

空港で救出を待つ日本人215名は絶望しました。そこにトルコ航空機が2機、日本人救出のためにテヘラン空港に飛んできて、制限時間にあと1時間というタイミングで、日本人を乗せイスタンブールに脱出させました。しかも、救援機に日本人を乗せたため、テヘランにいたトルコ人約5百人は、陸路で数日かけてイラクから脱出しなければならなかった。それをトルコ国民は憤慨せず、よくやったと受止めた。なぜ憤慨しなかったのか。約百年前の出来事への恩返しだと思ったからです。

### ■軍艦エルトゥールル号の座礁と乗組員救助

明治23（1890）年、皇族小松宮が現在のトルコとなっているオスマン帝国を訪ねた返礼として、オスマン帝国軍艦エルトゥールル号が日本にやってきた。その帰りは9月となり、台風が心配だからしばらく待てと日本人は止めたのだが、軍艦は出発。和歌山県串本沖で台風会い、蒸気機関が大爆発し座礁。使節団、乗組員合わせ650人が海に投げ出された。それを知った近くの大島樫野地区住民はわずか60世帯だったが、69人を救助。島だから食べ物がないなか、貴重なコメを炊き出し、盆・正月しか食べない鶏もつぶして、彼らが回復するまで助けた。

これを知った明治天皇は医者・看護師を派遣し、生存者全員を軍艦「比叡」「金剛」に乗せて、トルコに生還させた。またこのニュースを聞いて日本中から義援金が集まり、遭難者家族に届けられた。この義援金届けの役割を担った民間人山田寅次郎は、その後トルコに20年住み、トルコの商業発展に尽くし、茶の湯の文化なども伝えたので、トルコの親日の風潮が高まった。

トルコではエルトゥールル号救出・生還物語をすべての学校で小学5年生が習います。だから、イラン・イラク戦争時に日本人がテヘラン空港から出られないことを知った時、百年前の恩返しとして、トルコ人は自国の飛行機を日本人に譲った。それを誰も反対しなかったといえます。

### ■この物語映画化を支援しようと、NPO

串本町長は「利休にたずねよ」を撮った田中光敏監督と大学で同期だった。監督は、この話に“それは面白い”と反応。それが新聞記事になり、映画づくりがスタートしたのが5年前。話が、徐々に動き、単に商業的な映画ではなく、事実に基づく映画になるので、トルコと日本が協力してつくろうという話になってきました。

私は串本町出身。ICTの会社を経営していますが、たまたま串本町長と話したときにこの映画の話を知った。

また、エルトゥールル号の話を知らなかった和歌山市の企業家たちが、話を知って盛り上がってきた。市や町も寄付を出す。民間からの支援がないと映画は成功しない。そこで寄付を集め、映画作りを応援するNPOを2年前の6月に設立しました。

会員は現在749名で、和歌山県人が約半分。海外在住会員もトルコに7名、アメリカ、カナダ、UKなど海外に12名います。会計は通信費明細もすべて出す完全公開で、透明性高い運営をしています。4月にはNPOから映画企画会社に合計1千万円の寄付を達成しました。

東映が制作に参加、平成28年のお正月映画として封切するため、今年11月にクライクインする予定です。

### ■博愛のDNAを掘り起こそう

NPOの名称をなぜこう決めたのか。エルトゥールルの時代に、日本人は見たこともないトルコ人を必死で救助した。人類には人種を超えた博愛の精神がある証明です。

19、20世紀は戦う世紀で、21世紀の今もなかなか世界平和が実現しない。各国が不況に苦しみ、世界が殺伐としてきた。そこにこの映画を見てもらうことで、博愛のDNAを呼び起こそう。それができるのは、戦うエネルギーよりも調和のエネルギーを持っている日本人だと思う。

よく考えると日本は太陽も緑もいっぱい、水が豊富な素晴らしい国。いろいろな国を訪ねたがこんな国はない。津波後の日本人のふるまいが賞賛されたように、DNAに焼き付いたやさしくて謙虚な人間性がある。日本人は自信をもって世界の調和に立ち向かわなければいけない。

しかも、ヨーロッパの端に世界一の親日国、日本人応援団長のトルコがある。映画の公開で日本もトルコのことをよく知ることになり、ビジネスや文化で関係がより強く親密になって、互いに協力して世界を救うような動きをつくっていければよいと考えて、この名前にしました。

映画作り支援のNPOとしてスタートしたが、映画ができて終わりではない。本来の目的は世界平和への貢献です。今後は多くの人たちに映画を見てもらい、この物語を広く世界に伝えていくのが使命と考えています。

（2014年7月15日開催）